



第 48 号

発行日：令和7年3月18日
発 行：一中地区市民委員会
編 集：文化広報部会
事務局：一中地区公民館内
T E L：029-821-0104
世帯数：10,592戸
人 口：20,305人
(令和7年2月現在)



みんなの広場

琴の調べで、ワクワク体験、
元気になれる町にしたい！

土浦界限まちづくり研究会

代表幹事 高梨 美香子

私は土浦市の中城通りを中心に「土浦界限まちづくり研究会」という町おこし団体での活動をしています。自分でも驚きですが今年で8年目になります。もともとは、「土浦の雛まつり」をめぐってお琴を演奏させてもらえないか土浦市観光協会に問い合わせたのがきっかけで、そこでこの団体をご紹介いただき今日に至ります。

研究会は平成21年より中城通りに面した不動態・琴平神社の隣接地で活動を始め15年程になります。中城通りは趣のある歴史的な町並みの中に、江戸時代から続く老舗や、寺子屋があったとされる場所、明治時代から続く料亭、そして伝統技術を受け継いで来た店など、各時代を語る貴重な歴史文化遺産が現在に伝わっています。そこでこのような文化遺産を活用して後世に伝えるべく、地元の方々と一緒になって町お

こしに取り組んでいます。その精神は「温故創新」です。

先ず私が関わったひとつに、習い事のできるまちづくりをテーマに寺子屋亀楽(私が名付け親)での習字やお琴教室を開きました。お陰様で習字教室は大勢の生徒さん、お琴では土浦市中心に様々なイベントで演奏させていただいております。また、我々が運営する3施設、寺子屋亀楽(ぎらく)・「ミニミニティサロン聚(しゅつ)・井戸端庵では定期的にカフェやセミナー、講演会、チャレンジ教室なども行っていて多くの方々にきっかけづくりの場として活用していただいています。ここでの活動はメンバーの強み(武器)も活かしています。

特色として※ハレ(非日常)⇨亀の市、たなばた夕市、※ケ(日常)⇨御朱印頒布、老舗栗山園のお茶会協力、ボランティア活動モチベーションアップのボンド(絆)⇨カードスタンプ発行等、活動のユニークさでは負けません。

私が客観的に見て気付いた事は人々の地元愛の強さ、これは夏祭りの迫力を直に見て感じます。

こうした日々の活動の中で地域の方々との交流やお力添え、励ましの

言葉をいただきつつ、私どもにできることはないか常に考えています。

ほんの些細なきっかけで人々が巡り合う場所、少し話を聞いてもらって楽になった、ここへ来ると元気になる、ワクワク体験が出来そう等々、メンバーと考え活気あふれる町にしていきたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

この活動に参加したい方は、是非連絡をお待ちしております。

連絡先 高梨 美香子

090-1807-7681

※「ハレ」「ケ」とは、民俗学や文化人類学における「非日常」と「日常」を表す言葉。



永遠のライバル、それは妻

生田町 荻沼 敏雄

思えば、長い間私は土浦公設市場に店を構え、雨にも負けず風にも負けず、毎日三時半に起き仕事一筋に打ち込んできた。少々熱があっても疲れがあっても休んだ事は一日たりともなかった。そんな私に一大事件が起きた。三人兄弟で一番の出世頭、大企業の役員まで登りつめた弟が度重なる過労の為、すい臓ガンで急死した。悲しみも束の間、その一ヶ月後糖尿を患っていた兄が後を追うようにあっけなく、他界した。私はショックで頭の中がカラっぽになっってしまった。二人の死に私の人生は何だったのか、このままで良いのだろうか、悩んだ末出した答えが、「これから、自分のしたいように生きよう」だった。店も長男にまかせて、今まで出来なかった事を片っ端からやり始めた。山登りのサークルに入り、近隣の里山は殆ど登り、今まで味わうことのなかった自然に触れる喜びを知り気持ちが洗われた。

実現できなかった日本の至る名所を巡りもした。(これは妻も一緒に好きだった小説も図書館通いで色々な作家の本も読めた。そんな時、スー

パーの掲示板で卓球のサークル募集を見つけた。これからは健康に気を付けて何か運動をしなくてはと思っていた矢先、卓球は昔少々かじった事があるのですぐ応募した。上級者が多いサークルだった為何とか一員になれ、それからは面白さも手伝ってメキメキ上達した? と自分では思っていた。

妻は学生時代、バスケットボール部、結婚後はママさんバレーと運動神経抜群、反して私は文学部、運動音痴、だがそんな妻に卓球の試合を申込み、コメンパンにする事ができ、有頂天になっていた。それが妻の闘争本能に火を点けたのか、すぐに卓球スクールに通三回通い始める気の入れよう、プロが基本から教えたのだから、あつと言つ間に私のレベルまで達してしまつた。そんな折、土浦スポーツ健康倶楽部が主催する卓球同好会に二人揃つて入るといよいよ戦いの火蓋は切られた。

又退職後は朝ご飯は私が作り始め、妻の評価を恐る恐る待つ毎日、今日は美味しかった等と言われると増々料理に力が入る。この頃はこんな何気ない生活、料理も特に卓球も負けたくない永遠のライバルは妻だと思つてゐる。

残り限りある人生の意義は案外こんな身近な所にある小さな幸せではないかとつくづく思つて心境に今はなつてゐる。

お正月の過ごし方

虫掛町 柴沼 恭子

昔、お正月と言えば、親族が集まり賑やかに過ごすのが当たり前でした。実家の母は、お節を作つたり、泊り客の布団を用意したりして大変だったと思います。

私も、息子が結婚して家族そろつて我が家に泊まりに来るときには気を張りました。家の掃除、特にお風呂の掃除、お節、年越しそば、布団の用意などなど。

しかし昨今はお正月の過ごし方も変化しています。私の友人は旦那さんの実家には行かず、旦那さんと娘だけを行かせているそうです。別の友人は皆でレストラン集合だそうです。同居の家族でさえ各々でレストランに集合して別々に帰宅。同じ家に帰るんだけど、それぞれ帰りに寄る所があるとか…。

さらに別の友人はホテルをとつて家族で年越し。お正月の準備は特にしないそうです。

うちも今年は変わりました。息子

が近くに家を建て、車で十五分で行き来できます。泊まるとなると此方も準備が大変ですが、お嫁さんも幼児二人の何枚もの着替えや洗面用具の用意で大変、ということで泊まらないことになりました。

大みそかの午後に来て年越しそばを食べて夜帰り、また元旦の昼に来てお節を皆でつまんで団欒。お節料理もメインは買ったものです。子供たちは座敷でおもちやで遊んで、眠くなるころ帰ります。子供の生活のペースも崩さず荷物も少なくて済みます。

私もその方が楽ちん。いつもにちよつとプラスで贅沢な食事とゆつくりとした時間。なぜかふんだんに有るお菓子。体重だけはいつもと変わらず増えていました。あらまあ。



優しい言葉

ふじの出来い

大手町 93歳のご婦人

小学生から素晴らしい一言を頂きました。一言申し上げたくてペンをとりました。

私が杖を持って道路を歩いていた時、私の脇に子どもが自転車を止めて、おばあちゃんと声をかけられました。ヘルメットを被つた少女からの言葉でした。

「おばあちゃん転ばないでね、気を付けてくださいね。」

杖を持って歩いていたら私を気遣つてくれたその一言でした。

「車が多いからね、気を付けてくださいね。おばあちゃん。」

小学生の女の子が私にかけてくれた言葉、その一声が、おばあちゃんと言つたやさしい一言が、耳から離れませんでした。近所に住まれている方がどうか存じ上げませんが、お名前を聞かずに家に戻りました。老人には初めてのやさしい一言でした。

今の時代に簡単には出来ないことと、「おばあちゃん気を付けてくださいね。」

そんなやさしい言葉は聞いたことがありませんでした。

老人には素晴らしい言葉と思ひペンを取りました。

土浦市生涯学習館・ 勤労青少年ホームの閉館に想う

文京町 中川 恵子

文京町にある土浦市生涯学習館及び勤労青少年ホームが今年の3月に閉館することを聞き、1月の晴れた日に近所の方と施設を訪問した。何度も利用している場所だが、あらためて生涯学習館の所長園部さんと勤労青少年ホームの館長大塚さんに歴史をうかがった。正門を入って正面の4階建ての建物が「土浦市生涯学習館」左側の2階建ての建物が「勤労青少年ホーム」である。中庭に植えられた「センダン」の木が青空に映えていた。

勤労青少年ホームは、昭和46年に市内在住または市内で勤労する青少年の方を対象に各種講座が開催され調理実習室、音楽室、陶芸室や体育館などの設備も充実している。現在は利用対象者も様々で20団体の利用があるそうだった。

生涯学習館は昭和48年に土浦石岡広域圏内住民を対象に「土浦石岡地方社会教育センター」としてオープンし、その後平成22年に「土浦市生涯学習館」となり平成29年土



浦図書館が駅前に移転した。現在105団体の方の利用があるとのこと。

長い歴史のある素晴らしい施設を、文京町に住む私たちも沢山利用させていただいた。

春は駐車場と中庭の桜でお花見。会議室をお借りして町内班長会、総会。

夏は祇園祭、調理室をお借りして婦人会でお弁当作り。中庭に櫓を作り盆踊り。駐車場で夏休みラジオ体操や自転車点検。

秋には体育館をお借りして敬老の祝い、朝からお食事の準備で調理室はてんやわんや。市民体育祭の時は調理室で豚汁を作って一中の運動場までえつさくらさと大きな鍋を運んだ。

冬には会議室をお借りして子供会のクリスマス会。

たくさんの方の思い出が詰まった

会館の長い歴史に感謝し、閉館後もきれいに管理されている桜や中庭が地域の方の憩いの場として、今後土浦の発展のために利用されることを望みたい。

同好会だより

書いて学んで和気藹々

伯墨会 会長 渡邊 弘子

公民館の書道講座終了後、受講生で平成25年に発足したのが伯墨会です。講師に公民館長をなさっていた大塚博（伯葉）先生をお迎えし、会長には師範の資格を持つ高安公夫氏が着き、牛久市に本部を置く競書誌「書窓」を教材として、10名前後の会員で発足したようです。当時の会員の方は高齢になり退会された方が多く、会員数は唯一残された会計簿からの推測になります。私は比較的新しい会員ですが、入会した時の印象では、失礼な言い方ですが、書歴の違いからか上手な方とそうでもない方との力の差が見受けられました。

ところが今は実力伯仲。どなたも見違えるように上達しました。それというのも大塚先生の御指導が、一



人一人微に入り細に入り納得するまで教えて下さるからです。先生の熱心なご指導に答えるように生徒さんの方も自宅で繰り返し練習してくるよう、お稽古の日には楷書・行書・隸書・かな文字等たくさんの方の御指導を仰いでいます。先生と生徒双方の努力が上達をもたらしたものと、あまり熱心でない私は感心しています。

歴史の先生でもある大塚先生は、書の成り立ちや書き順序、意味ばかりでなく、各地にある石碑に書かれた碑文の意味や建立の経緯、県内にあった大名家の名前や領土、変遷等いろいろ教えて下さり、歴史好きな私には面白く参考になるお話ばかり



で、書を学びながら別の楽しみもあります。先生は公民館へはタクシーを利用していらつしやるのですが、お支払いする謝礼はタクシー代にも満たない金額で申し訳ないのですが、「ここでもみんなに教えるのが一番の生きがいだから、本当は謝礼はいらないんだ」とおっしゃって下さる先生のお言葉に甘えている現状です。

お稽古の日は「深」とした中にも和やかな雰囲気が漂い会員同志の仲の良さが伺われます。

92才と御高齢の先生には、いつ迄もお元気で私達を導いていつて頂きたいと心から願っています。

書は単に字が上手に書けるようになるばかりでなく、心身の安寧にも役立つ趣味であると思います。皆様もぜひ奥深い書の世界に遊びにいらつしやってみませんか？

俳句

亀城俳句会

緩みなき紺碧の空初氷

実千両ぼろぼろこぼし初いけ会

初日の出息子まもなく祖父となる

保育所のお散歩時間冬ぬくし

枯野かな昨日黄金の道なるも

空の青ジェット機雲と冬山と

個人

ダンボールに毛布を敷いて野良猫の宿

短歌

ノーマアの声高らかに冬の空世界の戦争平和をねがう

小女子は光の粒をこぼしつつ駈けてくるなり早春の街

東風吹いてこころ浮き立ち足早に佐保姫来たる街を歩めり

春の日は散りばめられた思い出が缶から飛び出すサクラドロップス

飯島 政和

野口 輝子

土井 直子

鈴木 みち子

高橋 百合枝

古澤 祥子

柴沼 恭子

櫻井 雅江

瀬古澤 和子

齋藤 順子

桑田 今日子

一緒に子どもたちの居場所を作りませんか？

一中地区子育て世帯を応援する会

代表者 新井 幸男

当会は、「子どもの居場所を作りたい！」というスローガンのもと、一中地区の高齢者四名により、昨年七月「子育て世帯を応援する会」を正式名称としてスタート致しました。

発足後、何度も話し合いや勉強会を重ね、楽しいイベントを催す活動資金を得るために、「子ども服おさがり市」と題し、一中地区公民館まつりにブースを出店するといった活動を行ってまいりました。

昨年は大きな活動として、夏休み期間中に週二回（火・金）に子どもの集いの場「あさがおサロン」を開設、また十二月には「クリスマス会」を開催しました。親御さん方々には感謝の言葉も頂き大変盛況に開催できました。

当会は発足後、20代の若い



メンバーが加入し、新しい風の元、企画・運営を行っております。これからの子どもの居場所作りのためには、たくさんの方の協力が欠かせません。

是非とも、この活動に賛同し協力して頂ける方がおりましたら、ご連絡いただきたく宜しくお願い申し上げます。（年齢、性別は問いません）問い合わせ先（メールアドレス）
1tyu.kosodate.ouennokai@gmail.com



「亀城」アンケートの結果概要

前号において、読者を対象にしたアンケートを実施させていただきました。ご協力ありがとうございました。

アンケート形式：紙面上の二次元コードを読み込み、WEB上で回答

回答者数：4名

アンケート結果概要

記事種類ごとの読む頻度について、読者皆様により近い「子どもの広場」「みんなの広場」が他記事に比べて多く読まれておりました。

また、亀城に投稿したい記事のアイデアを現在お持ちと回答をされた方もいらつしました。

特に、前号亀城47号についての感想として、

「これまで暗い紙面で標題位しか見ませんでした。紙面がカラーになっていて、読んでみようかなと思って読み始めたら、最後のページまで、初めて読みました。いろいろな活動があり、支えているボランティアの方がいらつしやる事がわかりました。これまであまり読まなかったのですが、次回が楽しみにになりました。」

とても励みなるご意見を頂きまし

た。

今後とも皆様に一層楽しんでいただけますよう、紙面を作成してまいりますので、引き続きご愛読いただきますと幸いです。

編集後記

いつも「亀城」をご愛読頂きまして有り難うございます。また、前号ではアンケートにご協力頂きまして、有り難うございました。皆様のお声を今後の紙面作りに活かして行きたいと思えます。

今号からは、新たに地区内の少年団を訪問させて頂き、活動の様子をシリーズでお届けする予定です。紙面を通して皆様に新たな出会いをお届け出来ればと思っております。どうぞお楽しみに！原稿をお寄せ頂いた皆様に感謝申し上げます。（J・O）

（本号の編集担当者）

小野村 一博／田中 久美子

新井 幸男／石川 幸子

大屋 潤／小泉 裕司

宮口 五郎／山本 敦子

社協中央支部だより

土浦市社会福祉協議会中央支部では『誰もが住みよく安心して暮らせるまちづくり』を目指し、さまざまな事業を実施しています。

今回は「ひとり暮らし高齢者交流会」をご紹介したいと思います。70歳以上のひとり暮らし高齢者の孤独感の解消、心身のリフレッシュを図ることを目的とし、日帰り旅行に行く事業です。今年度は『普段できないことを体験しよう』をテーマに2回開催いたしました。

1回目は6月に笠間市にある松佐陶工房さんで陶芸体験を行いました。雨が降るあいにくのお天気で、傘を差しながらの移動でした。工房の方の話をよく聞き、参加者の皆さんは夢中になって作品を作っていました。土に触れるという普段できない体験ができ、参加者の皆さんから「楽しかった。」「出来上



がりを楽しみ。」「あなたの素敵ね。」「作るの難しいわね。」という声が聞かれました。また作業中と同じテーブルの方とお話が弾んでおり、楽しそうに陶芸体験ができた様子でした。焼き上がりには数がかかってしまったため、お届けまで3か月ほどがかかってしまいましたが、一中地区公民館に届いた参加者の皆さんの作品は素敵なものばかりでした。参加者の皆さんの思いが詰まった作品は、民生委員児童委員の皆さんに協力していただき、無事にお届けすることができました。



2回目は、11月に大子町でりんご狩りを実施しました。りんご園に着いて、まず目に飛び込んだのは、つやつやに大きく実った真っ赤なりんごでした。バスから降りると、そこはりんごの甘い香りに包まれており、昼食後だったにも関わらず、試食のコーナーではみなさんおいしそうにりんごを頬張っていました。その後わくわくしながらりんご畑に向かいました。雨が降ったあとだったようで足元がぬかるんでいましたが、「転ばないように気を付けてね。」と参加者の皆さん同士で声をかけながら、歩いていらつしやいました。りんご狩りをする前に園の方から説明をうけ、おいそうなりんごはどれかなと探していました。近所の方へのお土産にとたくさんりんごを購入される方がおり、「重いわ。買いすぎちゃった。」と話されながら笑顔で帰りの



バスに乘車されました。男性の参加者が女性の参加者のりんごを持ってあげるといふ光景を見かけ、助け合いのすばらしさを感じました。



土浦市社会福祉協議会中央支部はこの事業以外にもさまざまな事業を実施しています。また福祉に関する困りごとがあればお気軽にご相談ください。

土浦市社会福祉協議会 中央支部
土浦市大手町13・9（一中地区公民館内）

TEL: 029・821・0104
FAX: 029・821・0193
(火曜日・日曜日 8:30～17:15)
月曜日、祝日は休館日

担当: 森川

地区内の少年団訪問記（第二回）

【芳明館】

剣道日本一を目指して

「め〜ん！」千束町の道場に小さな剣士たちの元気な声が響きます。

「打った後に相手から目を離しちゃ駄目ですよ。解りましたか？」

山下和真師範から厳しい声が掛けられ、道場内の空気が引き締まります。



夕方五時半から始まった小学生のお稽古が終わり、皆さんが集まりインタビューに答えてくれました。

記者「剣道を始めたきっかけは？」

高梨くるみさん「お父さんが剣道をしていたから」館長の娘さんでした。

記者「剣道を始めて変わった？」

長山しゅんたさん「寝る時間が減って、ご飯が1.5倍になりました」

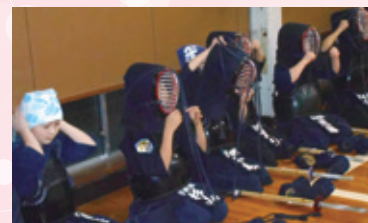
記者「剣道を始めて良かった？」

「た？」

皆さんから、一本取った時、チームが勝った時など色々。

「逆に辛い事や嫌な事がありますか？」

答え難い記者の問いに柴崎りむさんが、防具の無い右上腕を打たれてできた青あざを見せてくれました。



記者「目標は何段ですか？」

「お父さんの段を超えたい」そう答えてくれたのは、田口さとるさん、

りくさんの兄弟と小島こまきさん。

最後は集まってトロフィーや優勝旗の前で記念撮影です。



見学していた

親御さんにも剣道をやって良かったことをお聞きしましたところ、お子さんに、学校以外や学年を超えたお友達ができたこととお話し下さいました。

30分の休憩の後7時半からは中学生のお稽古です。お稽古前の準備で

お忙しい中、「剣道を始めて変わりましたか？」とお尋ねしました。竹内さん「挨拶が良くなりました」三浦さん「運動神経が良くなった」

最後に記念撮影をお願いすると、皆さん逃げてしまったのですが、逃げた先に集まってこちらを向いています。



「撮って欲しいのね？」とカメラを向けると笑顔でピース。お稽古が始まると、そこには引き続き小学生も参加し、総勢30名ほどで大混雑です。小さな小学生と比べ中学生のかかり稽古は迫力満点です。

お忙しい師範の先生方には、日を改めてお話を聞きました。

現在の館長は高梨賢吾先生。昭和56年に「芳明館」を開館した高梨友重先生から引き継いで指導をなされています。「芳明館」からは過去個人日本一を2名輩出、高段者が多数



いらつしやいます。高梨館長は、日本の伝統文化である剣道を伝え、心と体を鍛え礼儀を身に付けて欲しい、勝ち負けも大事だが生涯続けて欲しいとおつしやいます。



山下和真先生は、ご自身が小学2年生の時から「芳明館」に通い、多くのことを学んだことを振り返り、「昨今、人々が繋がる機会が少ないので、稽古生には剣道を通して色々な人と繋がり、礼儀を学ぶ場として欲しい」とおつしやられました。

昔は「芳明館」には一中地区の子供たちが多く集まっていたが、最近は一中地区以外の稽古生が多く、一中地区のお子さんにも剣道の魅力を知って欲しいとの高梨館長でした。

☎029-1823-3315

（文責 小野村 一博）